

Eureka VII

六年制通信 No.35 令和3年2月19日(金)号

立春の卵

私たちが高校生のころ、もう40年以上前になりますが、各教科のいわゆる「難問奇問集」が流行りました。大学入試のです。あれ、今持っていれば面白かっただろうなあ。最近その難問奇問に関する記事を読んだのですが、笑えますよ。どこの大学か記載がないのですが、「地理」の問題で、次の十の地名のうち油田地帯を選び、その国名を答えさせるという問題が昭和49年度入試に出たというのですね。「ルールケラ、ガワール、パオトウ、ガチサラン、ゼルテン、ビライ、ターチン、ドルガプール、プルガン、ウーハン」、いかがですか。当時の平凡社の世界地図にもほとんど載っていない地名だそう。これ、難問奇問じゃなくてクイズですよ。とある大学の「一般常識問題」では「次の地名のうち共通点がないものを二つ選べ」という問題。「三重、東京、静岡、青森、富山、福岡」、さて答えは…。静岡と福岡。なぜか。文字をタテに真っ二つにして左右対称にならないのはこの二つだけだから。こんなのクイズというよりトンチですわ。もちろん難問奇問ではありません。愚問ですらないですね。こんな大学で学ぶ必要はありません、よね。

こういう問題には意味がない。詰め込み教育に対する批判というのは、実はこの手の入試問題への批判でもあったのです。可哀想やったんやな、あの頃の受験生って。「受験生ブルース」という歌までありましたから。

どういう問題が望ましいのか。それはもちろん、自分の頭で考えて解答できるものです。材料は平等に与えられなければなりません。知識の有無、つまり知っていたら終わりという問題ではなくてね。中学校で習う知識だけを駆使して解く幾何の問題なんかいいですね。英語でもめったに出てこない単語を知っているかというマニアック合戦はいけません。語彙はわかるのに、文脈を正しく追わないと英文の意味がわからないような、一流の人の書いた英文を読ませるのがいいですね。とにかく、よく考えれば解答できる問題をよく考えて解答する、そういう試験がいいでしょう。

それから、何らかの能力に突出している人は入試など受ける必要はないと私は思います。これは「一芸入試」とは違います。けん玉で大学に入れるというような、アホなことをする大学が出てくるから話がややこしくなるのです。私は、例えば「大学への数学」の巻末の懸賞問題を解いて応募する、その内容に採点する先生方が驚愕し、毎回楽しみに待っている、これフィールズ賞の森重文教授の高校時代の実話ですが、こんな高校生のことを言っているのです。彼のような高校生に大学入試を受ける意味がありますか。大学から「お願いだから来てください」ですよ。

自分の頭で考え、一つの分野に突出した能力を持った人は、何でも少しずつちゃんと答えられるという優等生とは違う場合がよくあります。従って入試に落ちるのですね。ノーベル賞の江崎玲於奈は中学受験に失敗しています。日本の物理学を確立し、湯川秀樹をノーベル賞に導いた長岡半太郎は小学校で落第しています。寺田寅彦も中学受験に失敗。学校教育には優れた強い個性を生かせない何かがあると思えませんか。先入観を排し、自分の頭でじっくり考え、実験をして検証していく、そういう知性を入試は正しく計測できないのでしょうか。それで思い出したのですが、寺田寅彦のお弟子さんで、世界で初めて人工雪をつくった中谷宇吉郎が『立春の卵』という随筆を書いています。昭和22年（1947年）の作品です。今年の立春は2月3日でしたね。やろうと思って忘れていました。立春に卵が立つというニュースが世界中で流れたのです。で、実際に卵は立った。コロンブスのやり方ではなくて。世界中の人が何百年も卵は立たないと思い込み、コロンブスに感心してきたのに。中谷は「近來にない愉快な話」としながら、立春以外の日にも、ゆで卵でも、様々に実験し、卵が立つことを実証します。この随筆集は岩波文庫です。うちの図書館にありますよ。

こうして、ちゃんとやってみることが大切です。今まで思い込んでいたことや自分で確かめていないことは意外と多いものです。私は学生の頃 ad fontes（アド・フォンテス）、つまり「源へ」ということをやかましく言われました。孫引きをきつく戒められたのです。特にネットなんて嘘ばかりなので、信じてはいけません。以前あるエピソードが書かれていた本をどうしても思い出せなくて仕方なくネットで検索したらドストエフスキーの『地下室の手記』にヒットしました。直観的にそんなはずはないと感じたので、結局自分で探したところ、河出書房の『世界文学大系 43 ドストエフスキー VI』の『死の家の記録』24 ページ以降に、探していたエピソードが書いてありました。先生の教えを守ってよかった、そう思える瞬間でした。

今週のおすすめ

・谷沢永一 『名作の書き出しを語らる』 （幻冬舎）

「私はその人を常に先生と呼んでいた」という書き出しは『ころ』ですが、漱石は物語の書き出しに工夫がありますね。印象に残るものが多い。皆さんご存じの『吾輩は猫である』もそうだし『坊っちゃん』も一度読めば最初の一行は暗記してしまいます。そして何と言っても『草枕』ですね。「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」なんて、本当に一度読んだら忘れませんよね。まだ私が若かったころ、どこかの大学でこれを英作文しなさいという問題が出ましたが、君たち、書けますか？ 私の大好きな中島敦の『名人伝』は「趙の邯鄲の都に住む紀昌という男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立てた。己の師と頼むべき人物を物色するに、当今弓矢をとっては、名手・飛衛に及ぶものがあるとはおもわれぬ」と始まります。太宰治の『走れメロス』は「メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した」。司馬遼太郎の『坂の上の雲』は「まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている」です。やっぱり作者って書き出しに気をつかうのです。別に谷沢さんに頼らなくても、自分の好きな小説や詩の書き出しを語（そら）らるることができれば、素敵だと思いませんか。

BGM は ユーミン の 青いエアメール でした…。